

五等分の家庭教師

ドラしん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は前世、家庭教師のアルバイトをしていた。

しかも進級が危ぶまれる程頭の悪い世にも珍しい五つ子相手にだ。

それはとても大変で楽しくて、あいつらが成長すると自分の事の様に嬉しかった。でも、その日々はある日突然終わってしまった。

生まれ変わったら今度はどんな人生になるだろうか…

もし人間に生まれ変わったら真逆の生活を送ってみたい。

いつその事女の子に生まれ変わるのも悪くない。

いろんな理想が飛び交う中、ついに始まる新しい人生。

しかし、始まったその人生は到底予想出来ない物だった。

「…何で俺が教えられてんの？」

「だって」

「私達が」

「フリーター」

「専属の」

「家庭教師ですからー」

俺、上杉風太郎は前世の記憶を持ったまま再び同じ人生を歩む。

…立場が逆になった状態で。

最近どハマリした五等分の花嫁の小説が書きたくてつい勢いで投稿しちゃいました。

思い付きで始めたので矛盾点やおかしい所があるかと思いますが、その際は優しく教えて頂ければ幸いです。

また、こちらも不定期更新になります。自分のモチベーション次第で突然プツツリ更新途切れる事がありますのでご了承下さい。

更には幼稚な文、誤字脱字、キャラ崩壊等あると思います。

それでも良いよという心優しい方は是非暇つぶしに見ていって下さい。
それでは「五分分の家庭教師」始まりです。

ラブライブの小説と両立出来るかなー…

※現在更新をお休みしております。詳しくは活動報告をご覧ください。

目次

| | |
|---------------------------|----|
| 懐かしき前世の記憶① | 1 |
| 懐かしき前世の記憶② | 17 |
| 上杉風太郎。リスタートする | 41 |
| 出会いと再会は紙一重 | 50 |
| どうやら他の姉妹からの好感度も高い様 です① | 71 |

懐かしき前世の記憶①

それは遠い昔の話。

俺は前世、上杉風太郎という名で人生を歩んでいた。

母親は幼い時に亡くなり、父親は無駄にテンションが高く適当で、年の少し離れた妹は可愛くて仕方がない。

家は決して裕福とは言えずむしろ貧乏。借金だつてある程だ。

勉強嫌いだった俺はある時から家族の為に（殆ど妹の為）将来の選択肢を増やすべくただひたすらに勉強に打ち込みはじめた。

恋愛も娯楽も運動も全て捨てて。

恋も友も何もいらぬ。勉強こそが俺の青春。俺はそう自分に言い聞かせ、そして高校生になった。

勉強漬けの日々はいつも通り。一人で過ごす学校生活もいつも通り。毎回学食で焼肉定食焼肉抜きを頼んで冷ややかな目で見られるのもいつも通りだ。

しかし、そのいつも通りの日々はとある出会いによって崩された。

俺がいつもの様に焼肉定食焼肉抜きを注文しいつもの席に着こうとした時、あいつに

話し掛けられたんだ。

「私が先でした。隣に移って下さい」

「…は？」

思わず俺は声を漏らす。

目の前にいる前髪に星型の装飾をつけた少女は、少し不機嫌な表情でじーつとこちらを見つめていた。

「だから、私が先にこの席に座ろうとしたんです。なので移って下さい」

「…ここは俺が毎日座ってる席だ。あんたが移れ」

「関係ありません。早いもの勝ちです」

第一印象は最悪だった。

パツと見外見はかなり整っているがどうやら性格までは整っていないらしい。

だが、こんな些細な事ついムキになってしまうのは俺の悪い癖だ。

「じゃあ俺の方が早く座りました。はいこれでここは俺の席」

「ちよっ…」

我ながら幼稚な対抗策だったと思う。

だけどパツと思いついたのがこれだったんだ。

その後は彼女は何を思ったか俺の目の前に座りやがった。

小さいテーブルに2つしかない椅子。

旗から見れば恋人同士に見られてもおかしくない。

そしてその後はご飯を食べながら勉強する俺に説教してきたり、俺のテスト用紙を勝手に取って点数を見てきたりとやたら俺に構ってくる。

勘弁してくれ。こっちは一人が良いんだ。

だが俺の100点の答案を見て悔しそうにこちらを睨んできたのは少し気持ちが良かったけどな。

「こっちは勉強苦手なのに…」とぶつぶつ呟く彼女を無視しひたすらに箸を進めていく。

このペースで構われたらこっちの身がもたん。

次は一体何をされ何を言われるのか見当もつかない。

俺は一刻も早くこの場所を離れるべく更に食べるペースを上げていく。おかげで勉強に全く集中出来ない。

そしてようやく全てを食べ終わろうとしたその時、彼女は予想だにしない一言を俺に放った。

「そうだ、せっかく相席になったんです」

「勉強、教えて下さいよ」

本当にこいつの言動は理解できない。

最初は敵意を剥き出しにして席を取ろうとして初対面で説教してきたり勝手に勝手に答案を見てきたと思えば今度は勉強を教えて下さいだ？

冗談じゃない。俺にそんな暇は無いしこんな奴に勉強を教えるなんてごめんだ。

そう思った俺はごちそうさまでしたと一言だけ言い足早にその場を離れた。

彼女のさっきの発言を無視する様に。

「ちよ、それだけで足りるんですか!? 良かったら私のを…」

しかし、彼女はそれを許さなかった。

足早に去ろうとする俺を直ぐ様呼び止める。

…しつこい。こいつは一体どんな神経をしてやがる。

こんなにも不愉快オーラを出しているのにまさか気付いていないのか？

「…」

ふと彼女が注文したメニューに目を移す。

250円のうどんに150円の海老天2つに100円のいか天かしわ天さつまも天：更には180円のプリンのデザート付きときた。

ざつと合わせて1030円。あほか、俺の昼食1週間分じゃねえか。

なるほど。見た感じどうやらこいつはお金持ちっぽいな。道理で馬が合わない訳だ。

俺は冷やややかな目を彼女に向けてと、

「あんたが頼みすぎなんだよ。太るぞ」

と言い放った。

さすがにこれはダメージが大きかった様で、顔を赤らめ体をふるふるさせながら彼女は言った。

「無神経すぎます！最低っ！」

それは言わばこのやり取りの終点。

彼女の口からその言葉が出るならもう話し掛けてくる事は無いだろう。

俺は何も言わずにその場を去った。

…とまあこんな感じであいつとの出会いはお互い最悪だった。

え？その少女の名前がまだ出てきてないって？まあそれはこの後にちゃんと出てくるからもう少し待っていてほしい。

ともかくにもこれで平穏な日々が再び訪れ、俺はいつも通りの昼休みを過ごした。しかし、それは長くは続かなかった。

もし神様という存在がいたとしたらそいつはとんでもなく意地悪な奴だろう。

俺が取り戻したと思っていた平穏な日々は、昼休み終了直前に掛かってきた一本の電話により無様に崩されるのである。

「…ん？…らしいはからか」

上杉らしいは。前世での俺の可愛い妹。

家事も出来、小学生とは思えない程とてもしつかりしていて将来はきつとさぞかし立派なお嫁さんになれる事だろう。

その為にはまずらしいはに相応しい男を兄である俺が見分けなければ……………ゴホン。すまない少し取り乱した。

一先ずらしいはからの電話に出た俺が聞かされたのは衝撃の内容だった。

「お兄ちゃん！借金が無くなるかもしれないよ！」

らしいの話を要約すると、父の友人がこの町に最近引っ越してきたらしく、今娘の家庭教師をしてくれる人を探しているらしいのだ。

そこで成績学年トップである俺に白羽の矢が立った訳だ。

更にはお金持ちの家の様で給料もめっちゃ良い。

ただめっちゃくちゃ面倒くさそうだった為本当は今すぐにでも断りたかったが一向に減る気配の無い借金に加え可愛い妹からの頼みとなっては断られる訳にもいかなかった。

だから俺はその場で引き受けてしまったんだ。

俺の人生を大きく変える事になる家庭教師のアルバイトを。

しかし、そこからが問題だった。

らしいはから聞いた教える生徒の情報はただ一つ。【今日俺の学校に転入する】

そして、まさにその人は俺のクラスに転入になった。

開かれる扉。そこから入ってくる一人の少女の姿。
飛び込んできた現実に俺は落胆した。
なぜならそれは…

「今日からこのクラスでお世話になります。中野五月です。よろしくお願いします」
先程食堂で揉めた少女だったからだ。

そしてそこからはひたすら信頼回復に走った。

もう後戻り出来ない所まで来た俺は一先ずあの女の子…五月に謝るため次の日食堂へ走った。

しかしそこにあつたのは異様な光景だった。

「…!?…」

4人の友達と楽しそうに昼食を取る五月の姿。ここまでは何ら違和感はない。しか

し問題はその友達だ。

「…全員…そつくり…」

そう、全員付けてる装飾や髪型が微妙に違えど全員同じ顔、同じ体型なのだ。世の中には自分とそつくりな人が3人はいると言われている。

だけどこれはその逸話を超えているでは無いか。

何だ？ どうした？ ここはドツベルゲンガーのたまり場か何かなのか？

謝罪に来た俺はただただ混乱していた。

「……」

「……」

その時、不意に五月と目が合う。

しかし五月は直ぐ様不機嫌そうな表情に変わり、ピツと俺から目を逸らした。

…まずいな。これは相当怒ってる。

早い所謝らないと家庭教師どころでは無い。

だが今はドツベルゲンガーの友達と一緒にとても謝罪出来る雰囲気では無かった為特にアクションは起こさずいつものメニューを頼みいつもの席で昼食を取った。

…いや、取ろうとしたが正しいか。

席に座ろうとしたその瞬間、何者かに呼び止められたのだ。

「一緒に食べないの?」

「……」

驚いた俺はゆっくりと振り返り声の主を確かめる。

そこにいたのはドツベルゲンガー組の一人、シヨートカットの少女だった。

「席探してたんでしょ?一緒に食べようよ」

やたらグイグイ来るシヨートカットの少女…ドツベルゲンガー1号と名付けよう。

1号は柔らかな笑みを浮かべながらこちらに迫ってくる。

「く、食えるか!」

五月と短時間ではあるが二人で昼食を取った時でさえ落ち着かなかつたのにこんな女だらけのテーブルで食える訳がない。

しかもその内の一人は絶賛嫌われ中の五月だ。

俺は1号からの誘いを直ぐ様断った。

「何で?美少女に囲まれてご飯食べたくないの?」

「……食べたくない。」

そう言いたくてもはつきり言えないのが悲しいかな男の性だ。

にしてもこいつ自分から美少女って言ったよ…よっほど自分の容姿に自身があるらしいな。

嫌味の一つでも言つてやりたい所だが生憎その容姿は本当に整っているから腹が立つ。

「…」

口を閉ざした俺を見た1号はクスリと笑うと、ニヤニヤしながら口を開く。

「彼女いないのに?」

「こ、こいつ!グイグイ来るかと思えば煽つてきやがった!

これはさすがに何か言い返さないと俺の気が済まない!

「き、決めつけんな!」

「ん?じゃあいるのかな?」

勇気を出して発した俺の反撃はいとも簡単に交わされ逆にカウンターパンチを受ける始末。

だがここで引く訳にはいかない。

「い、いない…が…勘違いするなよ!?!彼女が出来ないんじゃない。作らないだけだ!」
…俺はどうにもすぐ頭に血が上る癪があるらしい。

予期せず声を張つて吐いてしまった言葉に俺はすぐに後悔した。

おいおい…この発言は…

「…それ、彼女出来ない人が言う言葉だよ?」

言われてしまった…

初対面の少女にはつきりと言われてしまった。それはもう心を鋭利な刃物で抉られる様にグツサリと。

もうエグすぎてもはやチエーンソーで真つ二つにされた気分だ。

ああ…穴があつたら入りたいとはまさにこの事…

我々の先祖は良くこんな言葉を作ったものだ。

「まあそれはさておいて、五月ちゃんが狙いなんですよ？」

軌道修正と言わんばかりに話題を変えた1号。

何だ。あんな恥ずかしい発言をした俺にまだ話し掛けてくんのか。

これ以上はやめてくれ。俺は今真つ二つにされた心を修復するのに精一杯なんだ。

「…」

「黙りつて事は凶星なのかな？決めてはどこ？真面目な所？そうゆうところ好きそうだなねー」

どうやら沈黙をこいつはYESと判断したらしい。

俺を置いてどんどん進んでいく話は本当に迷惑極まりない。

これじゃまるで本当に俺が五月に惚れてるみたいだろ。

「別にそんなんじゃない」

とりあえずこのままこの話を続けるのは危険だ。一刻も早く切らなければいけない。その前にまずは俺が五月に惚れてる前提を否定しなければ。

「あれ、そうなの？」

俺が否定すると1号は何だつまんないと言わんばかりにさつきまでの生意気なニヤけ顔が嘘のように消えた。

しかし少しするとまたニヤけ顔に戻り再び俺に詰め寄ってきた。

「あ、でも五月ちゃんの事気にはなってるでしょ？さつきから五月の事ばかり見てるし」
「どうやらこいつはどうしても俺が五月に脈有りという事にしたらしい。」

確かに五月の方ばかり見てるのは事実ではあるがそれはあくまでも謝罪の機会を伺う為だ。

そこに恋愛感情なんという物は一切存在しない。

「よし、折角だから私が呼んであげるよ。おーいいいっ…」

「待て!!」

勘違いのまま話は進みこいつは何を血迷ったか五月を呼ぼうと声を掛け始めた。

俺は直ぐ様1号の声がかき消されるくらいの大声で1号の動きを止めた。

全く…油断も隙きもあつたもんじゃやない。

「余計な事するな。自分の事は自分で何とかする」

俺は真剣な表情で1号に言った。

すると1号は一瞬驚いた様な表情を見ると、頬を少し明らめ謎に高いテンションで口を開いた。

「ガリ勉のくせに男らしい事言うじゃん！」

「…ぐっ!?!」

興奮してるのかは分からないが、中々の勢いで俺の背中に1号の手のひらがぶつか
る。

高いテンションのまま繰り出された背中への一撃は思ったよりも重いものだった。

「おまつーい、痛いだろうが！」

今凄い音したぞ!?!バチコーンって今まで聞いたこと無い音が背中から!

これは背中に手のひらの跡が残ってるオチじゃないだろうな!?!

「ガリ勉君」

しかし当の本人は全く気にする素振りを見せず、痛がる俺を無視し話を続ける。

謝罪の一つくらいあっても良いんじゃないんですかねー?

だってバチコーン!だよ?自分の背中からそんな音聞いたことあるか!?!

「な、何だよ…」

でもさすがにこれ以上齒向かう気にはなれない。

俺はもう察した。こいつには勝てない。

そんな俺をよそに1号はニヤニヤとした表情のまま、俺に言うのだった。

「もしも困った時はこの一花お姉さんに相談するんだぞ？何か面白そうだし」

1号：…もとい一花はそう言うかと満足した様に自分の席に戻った。

一体なんだったんだ：めちやくちや疲れた：

何か自分の事お姉さんとか言ってたけどどう見ても同じ学年だろ：

「…」

ここで何となく視線を五月に移してみる。他意はない。

すると五月もこちらを見ていた様で再び目が合う。

「…」

「…」

五月のその目は先程よりも鋭い物に変わっており、これ以上近付くなど訴えられている様だった。

うん。嫌われたな。

先程の一花とのやり取りで五月からの好感度が下がったのは言うまでも無い。

「…」これも全部あいつのせいだ…」

恨めしそうに視線を楽しそうに喋っている一花に向ける。

しかしその視線に気付く様子は無く、友達との会話に夢中だった。

「…はあ…」

とにもかくにもスタートラインにすら立てていない現状にため息が溢れる。

これは前途多難だ…

一向に先の見えないビジョンに、俺はただただ絶望するのだった。

既に冷めている焼肉定食焼肉抜きが乗ったトレイを持ちながら。

懐かしき前世の記憶②

一花と別れ絶賛絶望中の俺は、昼食が一向に進まないまま策を練っていた。

このままじゃいけない…

全ては妹の為、借金返済の為、妹の為…とりあえず何が何でも家庭教師が行える所まで行かなければならない。

…ん？今妹の為が重複した様な気がするがまあ気のせいだろう。

「上杉さん」

一先ず五月に許してもらおう事が絶対条件だ。

ただでさえ低い好感度がさっきの出来事で地に落ちた。このままではいけない。

「うーえすーぎさーん」

家庭教師の顔合わせは今日…俺に時間は残されていない…

ならば放課後五月が一人になった所を見計らって…

「うーえーすーぎさーん!!」

「…ん？」

何か前方から声がした様な…

すっかり考え込んでいた俺の耳に入る微かな声。

何も考えずに顔を上げたその時、そいつはいた。

「あ……」

「……」

初めて間近で見る女の子のドアップ。

良い匂いがする……睫毛長い……目が綺麗だ……っ……じゃなくて!!

「うわー！ドツペルゲンガーー！」

突然の出来事に俺は思わず仰け反った。

一瞬見惚れた気がしたが気のせいだ。そうに違いない。

「……ドツペルゲンガー？」

俺の咄嗟に発した言葉がよく分からなかったのか首を傾げながらこちらを見つめる

少女。

「……いや、何でも無い」

説明するつもりも無い為、忘れろと付け足し口を閉じる。

……にしてもまさか別のドツペルゲンガーが俺に話し掛けてくるとは思わなかった。

一花よりは長めの髪に特徴的なデカイリボン。

こいつも間違いない無くあのドツペルゲンガー組の中にいた。

てか友達と話してたんじゃないのかよ。

「にしてもやつと気付いてくれましたね」

柔らかな笑みを浮かべながらこちらを見つめる少女。もといドツペルゲンガー2号。

ここで俺は2号の発した言葉に少し引つ掛かった。

「…やつと気付いてくれた?」

「そうですよ。ずっと話し掛けていたのに全く反応無いんですもん。本当に気付いてなかったんですか?」

…マジか…それは全く気付かなかった。

「すまない。考え込むと周りが見えなくなる癖があつてな」

俺は申し訳なきようにそう言うと、2号は「そうですか。なら仕方ありませんね」と笑いながら言った。

ふむ…一先ずは五月や一花よりもまともそうで良かった。

「で、俺に何の用だ」

「あ、そうでした」

2号はそう言うと、俺の目の前に2枚のテスト用紙を出してきた。

「さあ、あなたが落としたのはこの100点の答案ですか!?それともこの0点の答案ですか!」

前言撤回。

全然までもそうでは無かった。

勿論俺のは1000点の答案だ。知らない間に落としたりしい。決してわざとでは無い。

となればもう片方の0点の答案は恐らく…

俺はチラリと2号の顔に視線を向ける。

無邪気に自分の1000点の答案と恐らく2号の物と思われる0点の答案を堂々と俺に見せ金の斧銀の斧もどきを楽しんでいる。

とりあえず素直に答えてあげるか。

「右」

「正直者ですね！正直者なあなたには両方差し上げます！」

「いらねえよー！」

笑顔で2枚とも差し出す2号に俺は思わずツッコむ。

どこの世界に0点の答案が欲しい奴がいるんだよ！

ていうか0点の答案なんて初めて見たわ。

「念の為聞いとくがこの答案は？」

「私のです」

「やつぱりか…」

どうやら俺の予想は当たったらしい。

最初はまとな奴かと思えば0点の答案を恥じらいも無く初対面の奴に見せてくるヤバい奴だった。

チラリと答案に書かれてる名前を見るとそこには「なかのよつば」と書かれていた。

…高校生になつても名前平仮名かよ。今時の小学生でも漢字で名前を書くぞ。

「とりあえずそれいらないから」

俺はサツと食事を済ませると、その場から逃げる様に食堂を去つていった。

「…にしてもあいつ何処かで見た事ある様な…」

ふと思いつ出すのはドツペルゲンガー2号ことなかのよつばの顔。

何処かで見たと言われれば顔がそっくりな一花や五月になるのだがそれは違う。それよりもっと前に会つた気がする。

ふと脳裏に浮かぶのは6年前、京都の修学旅行で会つた白いワンピースを着た少女。勉強が嫌いで、悪ガキだった俺を変えてくれた可愛らしい少女の顔だった。

「…まさかな」

何となくあいつの雰囲気があの子と重なつた気がした。

でもあくまでも気がしただけだ。

気のせいだと割り切り俺はそれ以上その事を考えるのをやめた。

そうだ。俺にはもっと考えなければいけない事がある。言わずもがな家庭教師の事だ。

こうなりやヤケだ。放課後、家庭教師の顔合わせの時間の前に何としてでも五月と接触する。何としてでもだ。

そう決めた俺は小さく気合を入れると、決戦の放課後に向け作戦を立てるのだった。

放課後になってからの俺の行動は早かった。

いち早く五月の姿を視界に入れ、一人になる瞬間を待つべくひたすらに後を付けた。

…あれ？よく考えればこれってストーカーなのでは？

………

………

………

………

いやいやいや何を考へてる風太郎。ここまで来たら形振り構つていられない。俺には時間が無いんだ。これも妹、借金、妹の為。

あ、また妹が重複したな

一先ず五月が動けば俺もこそこそと動く典型的なストーカーと化した俺は、ひたすらにチャンス伺つた。

傍から見れば犯罪予備軍……いや、もはや犯罪者に見えるだろう。

頼む誰も通報しないでくれ。

そんなこんなでしばらく五月を付け回していても一向に一人になる気配が無い。

それは五月がドツペルゲンガーの友達とずっと一緒だからだ。

「……くっ……邪魔だなあいつら……」

一花や四葉とは違うドツペルゲンガー。

ヘッドフォンを首につけたあまり表情の変化の無いドツペルゲンガー3号と、髪の両サイドに黒いリボンを付けた気の強そうなドツペルゲンガー4号。

てか今日1日でドツペルゲンガーという単語をめちゃくちゃ言つてるな。

もう一生分のドツペルゲンガーを言つたんじゃないか？……いやいや一生分のドツペルゲンガーって何だよ。ああドツペルゲンガー。

何はともあれこのままじゃ五月と接触出来ない。

どうにかして引き離さないと…あれ？

一瞬五月達から目を離れた俺が直ぐ様視線を戻すと、一つの違和感に気付いた。
一人足りない…

ヘッドフォンを付けてたドッペルゲンガー3号がいない。

辺りをキョロキョロ見渡してもその姿は見当たらない。

そして再び正面に視線を戻したその時だった。

「…」

「…あ」

こちらをじーつと見つめる3号と目が合ったのは。

「一人で楽しい？」

無表情で放たれたその言葉はどういう感情で言っているのかは分からない。

とりあえず今出来る事は慌てずに質問に答える事。

ここで慌てるのはクロのやる事だ。

俺は冷静を装いながら3号の質問に答えた。

「割とね。こういうのが趣味なんだ」

「ふーん」

眉一つ動かさずに言う3号。

何だこのドツペルゲンガー…全く何考えてるか分からん…

「女子高生を眺める趣味…予備軍」

3号はぼつりとそう言ううとスマホを取り出し操作し始める。

まさか…

「あの無言で通報するのやめて。そういうのじゃないから」

俺がそう言ううと、3号の動かしていた指がピタリと止まった。

危ねえ…あと少し遅かったら俺の人生詰んでた…

いやもう詰みかけてる気がしないでもないが。

「後、友達の五月ちゃんに言うのもやめてくれ」

我ながら図々しいお願いだ。

ストーカー紛いの事をしておいて都合の良い方向に持っていこうとしてるんだから。

3号は少し考える素振りを見せると、俺の抱えてるやむを得ない事情を察したのか

「分かった」

と一言だけ言つてその場を離れるのだった。

「…ふー…何とかなつた…」

こんなに冷や汗をかいたのはいつ振りだろうか。

中学の時のリレーの時以来かもしれない。

一息ついてると、目の前に3号が立っている事に気付いた。

「うおっ！あんた行つたんじゃないのか？」

「一つ、訂正しておこうと思つて」

…訂正？俺は今から何を訂正されるのだろうか。

まさか本当は既に通報していたとかいうオチか!? それならもう終わりだ：俺の、上杉風太郎という人生はこれで幕を閉じるんだ：

くそ！こんな事なら一度でも良いから焼肉定食の焼肉有りを食べておくんだつた！

「別に友達じゃないから」

「…え？」

頭を抱えてる俺に掛けた言葉は、予想外な物だつた。

「…友達じゃないとは？」

俺は思わず聞き返していた。

とりあえず通報されていた心配は杞憂に終わりましたまたホツと一息つきたい所ではあつたが、それよりも俺は3号のその言葉の真意が気になった。

「…五月ちゃんの事か？」

口を開かない3号に痺れを切らした俺は、予想で直接聞いてみた。

すると3号は小さく頷き、もう一人のドツペルゲンガーを指差しながら言つた。

「あの子も違う」

相変わらずの無表情で淡々と言う3号に俺は何も言う事が出来なかった。

…どうやら女の子同士の人付き合いも思ったより大変らしい。

3号は言いたい事を言つて満足したのか今度こそ二人の元へと戻つていった。

…女つて怖つ。

それからまた暫く経ち、3人がやってきたのは高級そうなマンションが並ぶ住宅街だった。

「うわ…マジで金持ちなのか…」

立ち並ぶ高層マンション。

俺とは縁の無い眩しい世界に目を瞑りそうになりながら歩を進めていく。

「…ていうかまだ離れないのかよ…」

一向に離れる気配を見せないドツペルゲンガー2人に焦りを募らせていく。

まずい、もう時間が無い…

きつと五月の家も近いのだろう。このままでは謝罪が出来ないまま初めての授業が始まる事になる。

そうならば当然勉強どころでは無い。

「……曲がった」

その時、3人が1棟のマンシヨンの方へ曲がる姿が確認出来た。

こうしちやいられない。急がねば。

そう思った俺は、全力疾走で曲がったマンシヨンへと向かう。

だが、それが畏だと分かったのはそれからすぐの事だった。

「何君ストーリーカー?」

「……」

曲がり角を曲がった瞬間それは起きた。

目の前には不機嫌そうな表情を浮かべた4号と相変わらざる無表情でこちらを見つめる3号。

…気付かれてた?…いつから?…どうやって?

上手く状況を飲み込めない俺は自慢の頭をフル回転させる。

やがて1つの答えを出した俺は、ドッペルゲンガー3号の方へ顔を向けた。

「お前…」

バラしたな？と言わんばかりに若干睨みを効かせた目で見つめると3号は直ぐ様口を開く。

「五月には言つてない」

少し勝ち誇つたかのように言う3号。その時ちよつとだけ表情が変わつた様な気がした。

…やられた。まさかドツペルゲンガーの方にバラされるとは思わなかつた…

「五月なら帰つたわよ。用があるなら代わりに聞くけど？」

そう言うのは警戒した様子でこちらを見つめる4号の姿。

まあ二人からすればストーカーに見えてるだろうから当然だ。

だが生憎君達に伝えるんじや意味が無いんだ。

「お前達じや話にならない。どいてくれ」

俺はそれだけ言うと二人を無視し歩き出す。

しかし俺の返答が気に食わなかつたのか4号は俺に詰め寄ると怒り口調で言つた。

「しつこい。君モテないでしょ？早く帰れよ」

並べられた辛辣な言葉の数々。

何このドツペルゲンガーめちやくちや口悪いじゃんか。普通に傷付くんですけど。

でも、ここでこいつらに弱みを見せてはいけない。

「帰るも何もここが俺の家だけど？」

俺は涼しい顔で嘘を吐く。

とりあえずこの場さえ乗り切れば何でも良い。

後の事は知らん。この嘘がバレようがここを通ればそれで良い。

そんな最低な事を思いながら堂々と俺は歩き出す。

ふと4号の顔に目を向けると、案の定しまったという表情を浮かべている。

よしよし計画通りだ。これで心置きなくここを…

「焼肉定食焼肉抜き。ダイエツト中？」

「3号おおお!!!」

通れなかった…

秒でバラされた俺は直ぐ様走り出す。

くそ！まさか聞かれていたなんて！

「あいつやつぱりここの住人じゃないわね！警備員さーん！」

「…3号？」

後ろで何やら聞こえるが知ったこっちゃない。

こうなりや強行突破だ。

マンションの中に入りふと前方を見るとエレベーターに乗り込む五月の姿があった。しめた！これでエレベーターに乗込めば間に合う！

俺はより一層走る速度を上げ、エレベーターに向かい全力で走る。

全ては妹の為に！

…あ、ついに妹だけになった。

「く、くそ…まさか自分の体力の無さを呪う時が来るとは…」

結論、間に合わなかった。

ギリギリで閉まってしまったエレベーターに落胆しつつも、立ち止まってはられないと自分の体に鞭を打ち階段を駆け上がる。

確かにいらいのは話では30階に住んでいると言っていた。

動け足！立ち止まるな風太郎！

例えどんなに疲れても…足が痛くても…動かし続ける！

息なんてとつくに切れてる。体力なんて当然残っちゃいない。

いらないと切り捨てた運動、体力がまさかこんな所で生きてくるとは思わなかった。
29階：もう少しだ。もう少しで着く。

この階段を上りきれば：俺はっ：

「待ってくれ！」

30階に到達するやいなや俺は直ぐ様叫んでいた。

そこに五月がいる事を信じて。

そして廊下に差し掛かると、そこには驚いた表情の五月が扉の前で立っていた。

良かった：間に合った：

疲労困憊で立っているのもやつとの俺。

俺はゆつくりと五月に歩み寄った。

「何故あなたがここにいるんですか？」

「はあ…はあ…実は…」

くそ…息切れが邪魔で上手く話せない…

もう少し頑張ってくれ俺の体!

「用件があるなら手短にお願ひします。これから家庭教師が来るので」

「それ…俺だよ」

「…え?」

「家庭教師…それは俺だ」

俺の口から紡がれた現実。

五月の表情が次第に青く染まっていく。

「嘘…あなたが…」

「分かる。嫌だろ?俺なんかが家庭教師なんて。でも悪いな、俺にも事情がある。これは仕方ない事なんだ」

俺は更には五月との距離を詰めると、五月の目を見つめながらはつきりと俺は言った。

「昨日の事は全面的に俺が悪い。すまなかった」

「今日から俺がお前のパートナーだ」

ようやく言えた…

家庭教師である事を…五月への謝罪を…

別にこれで許してもらえとは思ってない。

これで少しでも俺の罪が軽くなってくればそれで良いんだ。

「こんな人が…まさか…」

震えた声で呟く様に口を開く五月。

やはりそう簡単に落ちた好感度は取り戻せない。

まあそれはこの際どうでも良いことだ。好感度が低くてもこいつが勉強してくれればそれで構わない。

そう思った俺の淡い思いは、次の五月の呟きによって崩される事になる。

「【私達】の家庭教師だなんて…」

その時、エレベーターの扉が開かれる。

そこから現れた4つの人影。

その正体に分かると、俺の表情は一気に青く染まっていく。

「あれ？優等生君五月ちゃんと二人で何してるのかな？」

「あー！こいつがストーカーよ！」

「二乃、早とちりしすぎ」

「え？上杉さんストーカーだったんですか？」

「ま、まさか…」

「…そうです。今日から家庭教師に教えてもらう生徒は…」

「私達五つ子の姉妹です」

道理で…ドツベルゲンガーが多いわけだ…

これが俺の人生が大きく変わった瞬間だった。

最初は中々勉強会に参加しながらなかったが次第にやる気を見せ勉強と仕事を両立させた実は新人女優であるシヨートカットをした長女の一人。

俺に対し敵意剥き出して攻撃的だけど誰よりも繊細で家族思いな黒いリボンを付けた次女の二乃。

最初は何を考えてるか分からなかったが時間が経つに連れ表情が豊かになり苦手な物も克服しようとする頑張り屋なヘッドフォンが特徴的な三女の三玖。

最初から協力的であったが致命的なバカでそれでもポジティブに明るく前に突き進んだデカリボンが目立つ四女の四葉。

そして一番真面目で自分の夢に諦めず真っ直ぐ突き進み最終的には心を開いてくれ

た星型のヘアピンが印象的な五女の五月。

いろいろな事があつた。

それぞれ到底最高とは程遠い出会いをし、そこから一人一人と向き合いながら日々の勉強会や花火大会、林間学校、テスト、クリスマス、正月、家族旅行、修学旅行、文化祭を通して少しずつ信頼関係を育んでいった。

背中を押したり押されたり、優しい言葉を掛けたり掛けられたり、励まされたり励ましたり。

6年前に俺が変わるキツカケをくれたあの子との再会。

そうしていく中でそれぞれに芽生えた何か。

日に日に膨れ上がっていくその感情は、次第に自分達を飲み込んでいく。

気付けば周りが見えない程に。

そして俺は気付いたんだ。こんな関係間違つてるって。

最初は良かった。皆仲良く笑顔で過ごして勉強にも少しずつやる気を見せて時折ドキツとさせてくれる。

そんな家庭教師と生徒の関係を少しだけ超えたあの日々が好きだった。

でも、行き過ぎてしまえばそれは全く違う景色になってしまう。

騙し合い、蹴落とし合い、奪い合う。

そこに笑顔は何一つ生まれなかった。

違う。違う。俺が求めたのはこの景色じゃない。

どうしてこうなった？どこで間違えた？

姉妹の関係は壊れ、後戻り出来ない所まで来ていた。

時が経ち5人から好意を向けられる様になり、それは目に見えて膨らんでいき爆発した。

その結果がこれなんだ。

本当はもっと早くに答えを出していればこんな事にはならなかった。

選択肢だつて沢山あつたはず。

でも、答えを先延ばしにしてしまった結果、俺は1つの選択肢しか選ぶ事が出来なかった。

誰か一人を選んだとしてもこの争いが止むとは思えない。

かといって全員を選ぶのは現実的じゃない。

…だつたらもう一つしかないじゃないか。

【誰も選ばなければ良い】

そう決めてからは早かった。

俺は彼女達に自分の気持ち伝え、姿を消した。

俺が居たから彼女達はこうなった。

俺が居なければこうはならなかった。

極論を言えばこうだ。

成績は上がらなかったかもしれないが、それなら全員笑顔で一緒に過ごす事が出来た
だろう。

そこに俺という異分子が入った結果、姉妹の仲を切り裂く事になってしまったんだ。
だから消えた。彼女達の前に現れない様に遠く。

もういつその事この体のごと…心ごと消えてしまおうかと思うくらいに。

そして神様そんな弱った俺の心を察した様に、そつと、俺の背中を押したんだ。

真つ逆さまの体。逆さまの空。

脳裏に浮かぶ思い出の数々は思わず涙を流してしまう程懐かしく、幸せなものだった。

やがてその時が近付くと分かると、俺は呟いたんだ。

一花。

二乃。

三玖。

四葉。

五月。

【幸せになれよ】

そこから先の記憶はもう無かった。

上杉風太郎。リスタートする

「……夢か……」

飛び起きる様に体を起こした俺。

今の時間を確認するべく、俺はふと時計に目を向ける。

「……良い時間だな」

時間は丁度7時30分を回った所。

これは普段から俺が起きる時間であり、どうやら習慣付いた体が自然と俺を眠りから開放させたようだ。

キツチンの方からは良い匂いがしてくる。それに耳触りの良い心地良いフライパンで何かを焼いている音も。

「……懐かしい夢を見たな」

脳裏に浮かぶのはさっきまで俺が見ていた夢。

俺の前世の記憶。

物心がついた時から何故か俺は前世の事を覚えていた。

上杉風太郎という名前だった事。

父親と妹がいて家が貧乏だった事。

小学校の修学旅行で出会った少女によって俺が勉強一筋に変わった事。

頭の悪い五つ子の家庭教師に俺が選ばれた事。

喧嘩しながらも互いに少しずつ心を開き、楽しい毎日を過ごした事。

そして…そんな俺の日々が幕を閉じたあの日。

全て鮮明に覚えている。

これだけでも充分おかしい事になっているのだが、この俺の新たな人生にはこれよりも更におかしな事が起こっている。

それは…

「お兄ちゃん。朝ごはん出来たよ！」

「ありがとう、らいは」

上杉らいは。

俺の前世にもいた可愛い妹。

そのらいはが、俺の新しい人生にもいる。

つまりどういう事か。

【俺は今、上杉風太郎という名で再び同じ人生を歩んでいる】

何を言ってるか分からない？安心しろ。それは俺も一緒だ。

だが確かに言えるのはこれは間違い無く現実で、前世の記憶を持った俺が前世と同じ人生を歩んでいるという事。

…うん。益々何を言ってるか分からなくなつたな。

とりあえず冷めない内にらいはが作ってくれた朝ご飯を食べるとしよう。

それから朝食と身支度を済ませ、学校へ向かう俺。

書店で買った参考書を片手に、前世と同じ学校へのルートを通っていく。

前世の記憶を持ったまま始まった俺の新しい人生は、言い方が悪いかもしれないがと

でもイージーなものだった。

何せ前世の記憶だけで無く体力はそのまま受け継ぎ知力はさすがにそのままとはいかなかったが小学生レベルなら完全に理解出来る程。

まさに強いままでニューゲーム状態だ。

これは前世で頑張った俺へのご褒美に違いない。

何せ俺は進級すら危うかった五つ子の成績を信用やる気0の所から卒業可能レベルまで引き上げたのだから。

ともかくにもこれで俺は第2の人生を心置きなく謳歌できる。

しかも一度終わった上杉風太郎のままだ！

普通の学校生活：普通の恋愛：今度は自分の価値観だけに拘らないで甘酸っぱい青春を堪能してやると意気込んでいた俺は、そのままあつという間に中学生になり、月日が流れていった。

「…はあ…」

結論。それは叶わなかった。

俺のため息が人気の無い通路で木霊する。

「…何でこうなっちゃったんだか…」

俺は落ち込みながら手元にある参考書にもう一度目を通してみる。

…やっぱりだ。何度見ても結果は一緒に答えも同じ。

一通り目を通して終わると、俺はぼつりと呟いた。

「全く分からん」

そう。俺は前世の時より大幅に知力がダウンしていた。

くそ！何でだ!？何故こんな事になっているんだ？

知力は俺の唯一のアドバンテージ。しかし、2度目の上杉風太郎の人生ではそのアドバンテージを失ってしまった。

振り返るのは中学時代。最初に違和感を感じたのは中学に入ってすぐ受けたテストだった。

授業は理解出来てたし対策も万全。

今回も100点間違い無しだと意気込んで挑んだテストの最中、俺の動かしていた手が突然止まった。

「…あれ？」

そう。分からないのだ。

あれだけ予習復習をしたはずなのに突然そこだけ頭から抜け落ちたかの様に全く思
い出せない。

何度考えても捻りだそうとしても思い出す気配は無い。

あんなのは前世を合わせても初めてだった。

結局俺はこの人生で初めて100点を逃し、その日を堺に少しずつ俺の知力が崩壊し
ていった。

授業が進むにつれ頭から抜け落ちる現象が増えていく。

更には、授業中理解出来ていたはずの内容も理解出来なくなってきた。

おかしい…勉強だつてきちんとしているはずだ。

それなのに全く頭に入らないのは何故だ？

その答えは出せるはずもなくただ悪戯に時間だけが過ぎていき、中学3年生の最初の
テストでそれは起きた。

「…嘘だ…29点…だど？」

そう、生まれて初めて俺は赤点を取ってしまったんだ。

回答欄は全部埋めた。自身もあつた。

でも、それは大きな間違いだった。

回答欄がズレたとかいうバタなミスではなくただ単純な間違い。

その事実は前世を含め今まで100点を沢山取ってきた俺にとって屈辱以外の何物でもなかった。

それからはテストの度に赤点を取り、その度にクラスメイトから笑われ俺のメンタルはボロボロになっていく。

やつてもやつても追い付かない勉強。

増えていく間違い。

やがて小学生の時の俺を知るクラスメイトから、こう呼ばれる様になったんだ。

【落ちこぼれの天才】

小学生の頃は運動も知力もトップで天才と呼ばれる程。

しかしそれが中学になってからは日に日に落ちていき最終的には体力も知力も地に落ちた。

そんな俺にはピッタリな言葉だ。

…おっと。少し暗い話になってしまったな。話題を変えよう。
一先ず不安視していた高校も何とか受かり無事2年生に進級して今ここにいる訳だが、一つ気になる事がある。

それは、前世で俺が家庭教師を受け持った中野五姉妹の事だ。
人間関係、通う学校。どれも前世と同じで、俺は今回の人生前世と同じルートを通ってきた。

高校2年生の今日。前世ではこの日に中野五姉妹の末っ子中野五月と出会ったんだ。
となればこの人生でもきつと出会う筈だ。

しかし今回の俺は学力が無く家庭教師が出来るレベルには程遠い。むしろ俺に家庭教師を付けた方が良い程だ。

そうなると俺とあいつらが親密になったキツカケが無くなるわけだ。

…俺としてはあいつらが争う姿を二度と見たくないから俺との関わりが最初から消えるのは全然構わないのだが、一体これはどうなるんだろうか？

食堂でばったり会ってそれっきりだろうか？

それとも会う事も無いのか？

「…まあ行かなきゃ分からん話だ」

ここでグダグダ予想しても仕方がない。とりあえず向かうとしよう。

また冷ややかな目で見られるのか…と呟きながら俺は重い足取りで学校に向かうの
だった。

出会いと再会は紙一重

「…何だ？どうしたんだ？」

何事も無く学校に到着し教室に入ると、何やらザワザワとしたその様子に俺は思わず呟いていた。

日頃からガヤガヤしてるクラスだとは思っていたが、今回はさすがに異常だ。俺は自分の席に座ると、近くで喋っている男子生徒の集団に聞き耳をたてた。

「おい聞いたか？今日転校生が来るらしいぞ！」

「マジか！女子か？」

「ああ女子だ。しかもあのお嬢様校の黒薔薇女子の生徒らしい！」

「マジかよすげえ!!」

「クラスに来るのは午後かららしいけどな」

…うん。完全にあいつらの事だ。

やはり前世の通りあの五つ子と接触するのは今日らしい。

見た感じ他の所で話している内容も同じっぽいな。

まあ転校生という正体不明な異分子が同じクラスに入るとなったら興味が出来るのは自然な事。

しかもそれが有名なお嬢様校の黒薔薇女子の生徒であれば尚更だ。

それでも前世の時より噂されてる様な気がするのは気のせいか？

「どんな子だろう…可愛い子だったら良いな…」

頬を若干赤らめながら息を荒くしながら言う男子生徒。

安心しろ。ちゃんと可愛い子だ。

「あわよくば胸も大きかったら良いよな！」

別の男子生徒もハアハア良いながら興奮気味に言う。これはちよつと引いた。

でも安心しろ。胸もそこそこ大きい。

「あー！楽しみだー!!!」

テンションの高い男子二人はもはや周りが見えていないようで、興奮に押されるがままニヤケ顔で大声で叫び始めた。

注がれる女子からの冷ややかな目は当然近くの席にいる俺にも降り注ぐ訳で…

「本当に男子って嫌ね」

「単純」

「キモいんですけど…」

女子達が叩く陰口はわざと聞こえる様に言っているのかは分からないが、少なくとも俺の耳には入っていた。

この男子二人と同類だと思われているのは屈辱ではあるが、今ここで否定してもそれは更なる争いを生むだけだ。

今俺はやる事はこの二人の話に興味が無いと思わせる様に振る舞う事。

俺は机に顔を伏せると、二人とは無関係である事を示した。

…まあ効果があるかは分からないが。

「いやーにしても金持ちで可愛くて胸が大きいなんてマジで俺の理想なんだけど」

まだ続けんのかその話。俺に飛び火するからせめて遠くでやってほしいものだ。

「確かに理想だけどそんな完璧な子そうはいないだろ」

彼らは知らない。その理想の女の子が5人同じ顔でこの学校に来る事を。

そして運命の昼食の時間。

俺はあいつらが来ていないか確認するべく食堂へと来ていた。

「…まだ来てなさそうだな」

辺りをキョロキョロと見渡すも5つ子らしき人物は見えない。

ここで会うのは前世通りなら五月だけ。

それでも目を引くピンクの髪色と整った顔立ちは目立つはずだからまだ到着してないとみて間違いないだろう。

「焼肉定食焼肉抜きで」

俺はカウンターへ行くと慣れ親しんだメニューを注文する。

前世で抱えていた借金よりは少ないが、やはり上杉風太郎の人生には借金が付き物なようだ。この人生でも借金を抱えている。

その為俺は今回の世界でもこのメニューに頼らざるを得ないのだ。

まあ前世より借金が少ないのが唯一の救いではあるが。

「…前世ならいつものテーブルに向かう時に鉢合わせるんだよな」

俺は注文した品を待つ間、五月との出会った時の事を思い出していた。

「私が先でした。隣に移って下さい」

うん。いつ思い出しても初対面の奴に最初に言うセリフじゃないな。

まあ俺の態度も大概だけど。

懐かしいな。互いに印象が悪かった出会いだったはずなのに気付いたら恋心を抱くまでになつていた。

家庭教師を依頼された時も思つたけど、本当に人生つて何が起きるか分からないんだなつて心から思つたよ。

まさかあの出会いからあそこまで発展するなんて予想もしてなかった。

「はいよ。焼肉定食焼肉抜き」

「……」

前世の思い出に浸っていると、食堂のおばちゃんの声によつて俺は現実に戻された。

目の前には俺が注文したメニューが置かれているトレイ。

もう出来たのか。さすがは俺が愛するメニューなだけある。

何せご飯と味噌汁をよそつて漬物を添えるメニューなだけだからな。

「ありがとうございます」

俺は直ぐ様受け取ると、座る席を決めるべく食堂全体を見渡す。

五月達に会いたい気持ちは確かにある。だが、俺は決めたんだ。

この人生であいつらと関わらないって。

となれば当然前世で五月と出会ったあの席はアウト。

逆に考えればそれ以外の席なら良いという事になる。

出来れば前世と違う席で且つあまり目立たない席が良いが高望みはしてられない。
一先ず適当に席を…

席を…

あれ…？

「な、無いだど!？」

何故だ! いつももつと空いてるはずなのに何で今日に限って埋まってるんだ!

そして何で都合良くいつもの席だけ空いてるんだよ!

「くっ…これが神様の悪戯ってやつか…」

しかしこのまま立っているままではいられない。

五月との接触は避けられないが家庭教師のイベントは起きないからそこは救いだな。
後は五月の印象にあまり残らない様に振る舞えば完璧だろう。

「…ふう…」

俺は深く息を吐くと、意を決していつもの席へと歩き出す。

あまり関わりたくないという思いがある反面、楽しみだと思ってしまうてる自分がある。

2つの感情が入り混じりよく分からない状態のまま、俺は椅子に座った。

「…う？」

あれ、普通に座れたな。

前世なら座る前に五月と出会う筈なのにその気配が全く無い。

なるほど。さすがに全てが前世の通りでは無い訳だな。

「…まあラッキーか」

ここで関わらなかつたのは予想外だったが俺にとって十である事は変わらない。

さっさと昼食を済ませて教室に戻るとしよう。

俺はいただきますと小さく呟くと、慣れ親しんだ昼食を口に運び始めたその時だった。

「同席良いですか？」

目の前から聞こえる聞き慣れた声。

俺は昼食を進めていた手を止めると、ゆっくりと声のした方へと顔を向ける。

その正体は分かっている。前世にあれだけ会って関わってきたじゃないか。

それなのに…何で俺はこんなに緊張してんだ？

「…どうだい？」

俺の目の前に来た少女と目が合う。

変わらない。整った顔立ちもスタイルの良さも星型のヘアピンも…全て前世のまま。俺がよく知っている中野五月がそこにいた。

俺が五月の申し出を許可すると、五月は満面の笑みを浮かべながら嬉しそうに目の前の席に座った。

「ありがとうございます…上杉君っ」

五月はそう言うのと、いただきますと眩き凄いスピードで昼食を口に運んでいく。

どうやらその食欲も変わっていない様だな。

…ん？今、上杉君って言ったか？

「おい。何で俺の名前を知っている」

違和感に気付いた俺は直ぐ様疑問を問いかけた。

この世界では間違い無く初対面のはず。こいつが俺の名前を知っているはずが無い。どこで知った？もしかしてこいつも…

「あ、ごめんなさい！びっくりしましたよね？実は私、今日からここに転校するんです。

そこで前もって同じクラスの生徒の名前を調べてきたんですよ」

「…だとしても顔と名前が」

「も、勿論顔写真も一緒ですよ!!」

「そ、そうか…」

やや早口なのと少し慌てているのが気になるがまあその理由ならある程度納得は出来るか。

きつと父親も前世と同じだろうし、過保護なあおの父親なら娘の為に転入先のクラスメイト全員の名前と顔写真を用意するくらいはしてもおかしくない。

びつくりしたぜ…もしかして五月も前世の記憶があるのかと思った。

さすがにそれは無いよな。

「それでは折角ですし自己紹介しましょう！」

「自己紹介？」

「そうです。私だけあなたの事を知っているのは不公平なので」

「別に良い」

知ってるしな。

「そう言わずにしましょうよ自己紹介！」

何だよめちやくちやグイグイくるな。

…いや前世の時も初対面で勉強の教えを頼んできたくらいだしこれも変わってないのか。

「やらん。面倒くさい」

俺は少女の方に見向きもせず答える。

まあ冷たく扱っておけば前世の時みたいに嫌われるだろう。

「むっ、そこまで言うなら良いですよ。私が勝手に自己紹介します」

…と思っていたのだが何でそうなるんだ。

「私の名前は中野五月と言います。下の名前で呼んでくださいね？」

勝手に自己紹介してるし…

なんか前世の時と微妙に性格違わないか？何か前世の時より優しい気がするんだが

…

「午後から上杉君のクラスに転入になるので、よろしくお願いします！」

ニコニコとした表情でこちらを見つめる五月。

それにしても五月が初対面の人に対してここまで笑う奴だと思わなかった。
心なしか警戒心も全く無いように見える。

前世の時と大分丸くなった五月に少し困惑しながらも一言だけ返した。

「ああ、よろしく。五月」

俺の返答を聞くと五月は、

「はいー」

とまた嬉しそうに笑うのであった。

「(一)馳走さまでした」

それから少し経ち無事昼食を食べ終わった俺は立ち上がり食器を下げに動き出した。
五月がやたら話し掛けてきたが、適当に返事をして済ませた。

無視をするという手もあつたが俺とて一人の人間であるこいつの事を良く知る人物。そこまでするのはさすがに気が引けた。

「あ、ちよつと待つて下さい！それだけじゃ足りません。私のあげますから食べてください」

俺が歩き出したその時五月が直ぐ様俺を呼び止める。

そうか。そう言えばこの展開あつたな。

あの時もそうやって自分の昼食を分けようと勧めてきたんだつた。

となれば俺があの時と同じ返しをすればもしかしたら五月はまた俺に苦手意識を持つんじゃないか？

確か俺があの時言った言葉は…

「あんたが頼みすぎなんだよ。太るぞ」

俺は前世の時と同じように冷ややかな目をしながら五月に言い放つた。

「……」

五月は一瞬ビククリした様な表情を浮かべるとそのまま俯く。

これでさすがに五月は俺への印象を悪くするはずだ。

そう思つた俺は、そのままその場を立ち去ろうと五月に背を向ける。

しかし、そんな俺の予想は大きく外れる事になつた。

「ちよ、ちよつと待つて下さい！」

呼び止められる俺。

予想外の出来事に俺は思わず足を止める。

「…はい？」

あれ…前世もこんな感じで俺呼び止められたっけ？

俺は恐る恐る振り返ると、そこには少し顔を赤らめた五月が立つて俺を見つめていた。

ああなるほど。俺と面と向かつて直接文句を言うつもりだな。

…いや待て。だとしたら何故そんなに恥ずかしそうにしている？

「あの…上杉君」

「な、何だ？」

「上杉君は…」

五月は一步俺に近付くと、上目遣いのまま俺に言った。

「たくさん食べる女の子は…嫌いですか…？」

「…！…！」

あまりの破壊力に俺は思わず五月から目を逸らす。直視するのは危険。本能的にそう感じた。

「……」

あ、危ねええええ！もろ顔に出るとこだったー！

出てないよな!?顔に出てないよな!?

五月のやつ何で急にあんな顔するんだよ…顔を赤らめた状態で涙目で上目遣いなんて破壊力抜群過ぎるだろ…

「…上杉君?」

「な、何だ」

「どうしたんですか?顔背けて」

「いや、気にするな」

どうやらまだ顔は赤くなっていない様だがこれはいつ変わってもおかしくない。

幸いまだ五月にはバれていないがこれも時間の問題。

だがさすがにこのまま目を逸らしたままではいけないか…

胸の高鳴りを自覚しながらも、俺は意を決して五月の方へと目を向けた。

「さっきの質問だが…」

「…はい…」

「……」

くっ…五月の顔を見るとさっきの表情がフラツシユバツクする。

やはりこのまま直視は危険だ…

俺は五月から少しだけ目を逸らすと、五月に聞こえるか聞こえないかぐらいの音量で答えた。

「別に嫌いじゃ…ない」

「ほ、本当ですか!?!」

「…あ、ああ」

「良かった…それなら気兼ね無く食べる事が出来ますね…あ、でも太ったら嫌われちゃうかもしれないから…ブツブツ…」

俺の言葉を聞いた五月は花が開いた様に嬉しそうな表情を浮かべると、そのまま注文した自分の昼食と向き合いながらぶつぶつと呟きだした。

とりあえず良く分かんないけど今の内に離れるとしよう。

俺は再び五月に背を向けると、その場を足早に去った。

無事教室に戻った俺は、授業が始まる時間まで勉強をする事にした。

とはいっても何故か今回はいくら勉強しても身につかない謎の現象に陥ってるが、何もしないよりはマシだ。

俺は問題集を開くと、一心不乱に取り組んだ。

「なあなあ、さつき職員室の近くでめちやくちや可愛い女の子いたんだけどもしかして転校生じゃねえかな!？」

その時、さつき転校生の噂をしていた男子生徒二人が無駄にデカイ音量で話し始める。

「俺も見た見た! 食堂の近くで見たぜ可愛い女の子! あれだろ? 星型のヘアピンしてた子だろ?」

「いやいや頭にデカイリボンを付けた子だろ?」

「はあ。」

目撃した女の子の特徴の違いにどうやら二人は困惑しているようだ。

二人が見たのは五月と四葉か。

本当は後3人いるって知ったらどんな顔するんだろうな。

男子達の会話を耳にしながらい向に進まない問題集とにらめっこをしていたその時、勢い良く教室の扉が開かれた。

「おーいお前ら席につけ」

教室に入ってきた先生。

五月がこのクラスに来る時がどうやら来たみたいだ。

俺は1問も解けなかった問題集を片付けると、先生の方に目を向ける。

「今から転校生を紹介する。入ってきて良いぞ」

先生の言葉にクラス全員の視線が教室の扉に集まる。

そして教室に入ってきた転校生の姿を見てクラス（主に男子）から声援が飛ぶ。

「可愛い!!」

「胸でけえ!!」

「仲良くなりたーい!!」

「彼氏いるのかな…」

「是非結婚を前提に!!」

あまりの騒ぎっぷりに女子達から冷ややかな視線が飛ぶ。

しかし、男子達は気にもせず声を張り続けた。

どさくさに紛れて告白してる奴もいたが恐らく彼女の耳には入っていないだろう。

「はいはいお前から気持ちちはわかるが静かにしろ。じゃあ自己紹介よろしく」

「はい。今日からお世話になります中野五月です。実は私珍しい5つ子でして、クラスは違います但他的子達も今日転入になります。なので中野さんだと紛らわしいので五月と下の名前前で呼んで頂けると助かります。これからよろしくお願いします」

そう言いペコリと頭を下げるその姿に、男子達の声援がより一層大きくなる。

「綺麗だ…」

「可愛いすぎる!!!」

「さすが元お嬢様校!!!」

「付き合いてえええ!!!」

「五月ちやあああん!!!」

「あ…あはは…」

あまりの人気ぶりに五月は苦笑い。

ていうか前世の時よりも人気な気がするんだが…

「じゃあ君の席は真ん中の一番後ろの席だ」

「はい」

先生に座る席を教えてもらうと、五月はニコリと微笑み席へと歩き出す。

その姿を顔を赤らめながら目で追う男子達。

一方の俺は五月の事を良く知っているので興味無さそうに頼杖を付きながら一応五月の方を見つめる。

そして五月が俺の席の隣に来たその時、不意に目が合った。

「……あ……」

俺の姿に気付いた五月が小さく声を漏らすと……

「……ふふっ」パチッ

「……」

微笑みながら俺に向かってウインクした。

「お、おい……」

五月は困惑する俺をよそに自分の席に座ると、近くに座っていた女子と楽しそうに話し始めた。

「な、何だったんだ……」

食堂の時といい今といい五月からの好感度高くないか!?

一体何が起きてるんだ……俺が嫌われる原因の一つである「太るぞ」のワードをはつきり言ったんだぞ?

好かれる要素なんて何一つ無いのにどうして……

「……」

チラリと五月の方へ目を向ける。

さつきと変わらず女子達と交流を深めているようだ。

あいつらとあまり関わらない様になると決めたのに何故か高い俺への好感度。

家庭教師のイベントも当然起きなかったしあいつらと親密になるキツカケは無いはずなのに何だこの胸騒ぎは…

「はいはい。親交深めるのも良いが授業を始めるぞ」

前世と同じに見えて大きく違う今回の人生。

この時の俺は知る由もなかった。

「…ふふ…やつと会えましたね」

俺とあいつらはどう転んでも…

「今度は絶対に離しませんよ。上杉君…」
離れられない運命である事を。

どうやら他の姉妹からの好感度も高い様です①

「よし、では今回はこのままで。号令」

「起立。礼。着席」

聞き慣れた鐘の音と共に授業が終わる。

結局俺はこの授業に集中する事が出来なかった。

原因は勿論五月だ。食堂で見せたあの表情とすれ違いざまに見せたウインクが頭から離れない。

何故俺がこんなに好感度高いのか分からないが、問題は残りの姉妹だ。

さすがに最初から姉妹全員に好かれてる訳ではないだろう。

五月だけであつてほしいものだ。

後ろでは五月がクラスメイト達から質問攻めにあつている。

五月とお近付きになりたい男子で殆どではあるが、真面目な五月の性格上きちんと全員の質問に答えるだろう。

「五月ちゃんて彼氏あるの?」

出た。絶対この手の質問はされると思ったわ。

まあ俺には関係ない。

「彼氏ですか？いないですよ」

あれ。照れるかと思つたのに意外とすぐ答えたな。これは予想外だ。

五月の言葉に「やったー！」と騒ぐ男達。フリーだと分かつてより一層やる気が出たのだろう。

そして男子が次の質問を口にしようとしたその瞬間、五月が先に口を開いた。

「でも、気になる人はいます」

五月の言葉に、男子達の動きが止まった気がした。

「……え？」

「い、五月ちゃん……それって好きって事？」

「ふふっ、それは秘密です」

五月の返答に騒がしくなる男子達。

よつぽどシヨックだったのか、「終わった……」や「俺の青春が……」等絶望している男子が複数出始めた。

中には「大丈夫だ。まだチャンスがある」や「好きって決まった訳じゃない」といった不屈の精神を持つ強者もいた。

まあ金持ちで美少女でスタイルが良いという非常に珍しい人種だから諦めたくない気持ちも分からんでもない。

だがそういう事はせめて本人のいない所で言おうぜ。

多分ガツツリ聞かれてるぞ。お前らの声。

「ち、ちなみにその相手は…」

「勿論秘密です」

…まあそりやそうだよな。

好きか否かの質問の答えが秘密なら当然この質問にも答えないだろう。

にしてもまさか五月にそんな人がいるなんてビックリだ。

前世の時はそういう話一切無かったからな。俺が知らなかっただけで前世にも居たのかもしれない。

一先ず背中突き刺さっている視線は五月の物じゃないと思いたい。

三玖がいたら自意識過剰とか言われるかもしれないが、食堂での表情とウインクを見せられたらどうしても意識してしまう。

「…一回クールダウンしよう」

ともかくにもこのままこの場所にいるのは体に悪い。

そう思った俺は立ち上がると、そのまま教室を出ていった。

「ふう…」

人気の無い屋上。

そこに俺は一人佇んでいた。

どうにも五月の目を意識してしまう自分がいる。

確かに前世ではあいつらの事は好きだった。勿論友達としてでは無く異性として。

だが俺が全員を好きになってしまいあいつら全員俺に好意を寄せていたから姉妹同士で騙し合い、傷付け合う事になってしまった。

すぐに一人に絞らなかつた俺に責任はある。でも、選べなかつた。

俺はあいつらの笑顔が好きだ。

でも、俺のせいであいつらの笑顔が消えたのなら俺はあいつらの隣にいる資格は無い。そう思ってしまったんだ。

それだったら全員平等に…だから俺は、誰も選ばなかつた。

我ながら馬鹿な考えだったと思う。

でもそれくらい俺は全員が平等に好きだった。一人に決められない程。あいつら全員と過ごせばとも思った。でもそれは現実的じゃないし何よりあいつらが許さないだろう。

今、あいつらが好きかどうかと聞かれれば間違いない無く好きだ。これは揺るがない。でも俺は前世と同じ二の舞を演じない様にあいつらと深く関わらないと決めた。きつと俺はこの先も、答えを出せないだろうから。

「…後5分か…」

折角一人だしこのまま授業が始まるギリギリまでここにしよう。

凄く落ち着くし。

にしても風が気持ち良いな。頭がポーツとする。

「…もつと前まで行ってみるか」

この心地良い風をもつと堪能したい。

その一心で俺は吸い込まれる様に屋上のフェンスに向かい歩き始めた。

「うおっ…結構気持ち良いな」

フェンスに掴まり外を見渡す俺。

頬を撫でる風が心地良くて心が癒やされるようだ。

そしてほんの好奇心に押され軽く身を乗り出したその時、屋上の扉が開かれた。

「……えっ？」

「……あ……」

首だけ扉の方へと向けると、見覚えのある少女と目が合う。

その少女は俺の姿を見るやいなや、目に涙を浮かべながらこちらに向かい勢い良く走り出す。

「だ、ダメえええー!!!」

叫びながらこちらに走ってくる少女の様子と言葉を見聞きして俺は気付く。

ああそうか……今の俺って傍から見たら……

……飛び降りようとしてる人だもんな……

「ま、待て！別に俺は……」

「上杉さあああん!!逝っちゃ駄目ですううう!!!」

「ぐおっ!!」

猛スピードで突っ込んだかと思ったら凄い力で腕を引っ張られ少女に抱き締められたまま地面に倒れる。

特徴的なデカイリボンを揺らしながら俺の上に乗る涙を流しながら口を開く。

「危ないじゃないですか!!」

離さないと言わんばかりに強く抱き締められる俺。

女の子特有の甘い匂いと共に柔らかい感触に包まれた俺は頭が真っ白になっていた。

「人の気配がすると思つて来てみたら飛び降りようとするなんて…私…私つ…！…」

「ち、違うんだ！別に俺は…」

「言い訳なんて聞きたくありません!!」

「いや、だから…」

「私は絶対に離しませんよ!!」

「あの…」

「あー何も聞こえません!!」

「いいから話を聞けデカリボン!!」

「あつ！あつ！あーつ!!リボンはっ、リボンだけは引つ張らないでー!!」

それから少し経ち、お互い体を離し冷静になった所で改めて話をする。

目の前に頬を少し膨らませながらこちらを見つめるデカリボンこと中野家四女、中野四葉に向き合いながらもまずは事情を説明する事にした。

「…それで、風を感じようとして別に飛び降りようとしていた訳ではないと?」

「…そうだ。第一俺に飛び降りる理由なんて無いし、そんな度胸もねえよ。全部お前の勘違いだ」

「…それはごめんなさい。でも、あんな所見たら誰でも勘違いしますよ!」

「…そこはすまん」

四葉の言う事は最もだ。確かにあの状況なら勘違いしてもおかしくない。

だが、俺が気になっているのはいくら他人との距離感がバグっている四葉でも初対面の奴に対してあそこまでやるのかどうかだ。

…あーでも確か前世では5年前に京都で会った女の子は四葉だったんだっけか。

当然この世界でも京都に行った際に女の子と出会っている。

時々「もう時間…」とぶつぶつ呟きながらトイレに行っていた事以外は前世と変わらなかった。

となればあの女の子は四葉である可能性が高いが、そうだとしても果たしてあそこまでする必要があったのだろうか?

そしてもう一つ。

「…とりあえず名前は?」

「あ、今日から転校してきた中野四葉です。クラスは違いますけど、よろしく願います」

す

「ああよろしく。それで四葉。何故俺の名前を知ってるんだ？」

「……」

そう。気になっているもう一つはこれだ。

五月の時は事前にクラス全員の名前と顔写真を見てきたと話していたがクラスの違
うこいつはそうはいかない。

もしかしてこいつ……

「あ、え、えーつと……ほら、5年前に京都で会った女の子！覚えてませんか!？」

「……え」

うおおおい!!?前世ではあれだけ隠してたのにあっさりバラしやがった!?

マジかよ!え、どうしちゃったの四葉!?

「あ、ああ……もしかしてあの時会った女の子って君?」

「そうです!!今でも昨日の事のように思い出します……上杉さんと一緒に京都を見て回った

夢の様な時間が…」

京都での出来事を思い出しているのだろう、顔を少し赤らめながら思い出に耽る四葉。

四葉つてこんなキャラだっけ？と思いつつ俺は四葉の頬を軽くぺちぺちと叩きながら現実へと戻す。

「おい。戻ってこい四葉」

「…はっ！私は何を…」

前世と違う四葉の様子に俺は困惑しながらも話を先に進める為に口を開いた。

「一先ずお前が5年前に俺と会った女の子だという事は分かった」

「はい！ですから私嬉しかったんですよ？上杉さんと再会出来て」

うっとりとした表情を浮かべながらこちらを見つめる四葉。

…何か前世の時と比べて籠が外れている様な気がするのは気のせいだろうか？

「ここで会ったのも何かの縁です！このままお話でも…」

「待った。もう授業が始まる時間だ」

ふと携帯に目を向けると授業開始まで残り2分を切っていた。

時間が無い。早く戻らなくては。

そう思った俺は会話を切り上げるべく再び四葉に目を向けると、四葉がとんでも無い

事を言い出した。

「え、1時間ぐらい良いじゃないですか」

「馬鹿、そんな訳に行くか。しかもお前転校初日に授業サボる気か？」

いくらなんでもそれは許す事はできない。元家庭教師としてな。

「むう…」

「頬を膨らませてもダメだ。行くぞ」

俺は不満そうにこちらを見つめる四葉を無視しそのまま屋上を去ろうとする。

しかしその瞬間不意に腕を掴まれると背中に柔らかい感触が広がった。

「…お、おいっ…」

「…ごめんなさい…少しだけ…もう少しだけこのままで…」

抱き締められているのだとすぐに分かった。

しかもさっきの様に力強いものでは無く包み込む様に優しく。

懇願する様に震えた声で言う四葉の様子に、突き放す事は出来なかった。

「…」

「…」

続く無言の時間。

背中に感じる暖くて柔らかい感触とチャイムが鳴らないかの不安が入り混じって2

つの意味でドキドキしている。

まだチャイムが鳴っていないという事は抱きつかれてから全く時間が経っていないという事実。

体感ではもう5分ぐらい抱きつかれてる様な感覚だ。体の暑さといい精神的な疲労といい。

それにしても四葉ってこんなに甘えてくる奴だったか？

抱き付き癖がある奴だったか？

いや違う。距離感近くてもさすがにここまででは無かった。

何故か前世の時よりも高い俺への好感度は、こうゆう形で精神的なダメージをかわせてくる。

一体俺が何をしたというんだ…

「…ふう…よし、これでバッチリです」

四葉はそう言うのと満足そうな表情を浮かべながら俺から離れていく。

体感では数分くらいだったけれど実際は数十秒程の出来事。

抱きつかれた時の感触と暖かさが今も残っている。

「ごめんなさい突然…でも、これで次の授業も頑張れそうです！」

「…そうか、それは良かったな。次からは俺無しで頑張れ」

何故授業を受けるのに俺との抱擁を経由する必要があるんだ。

前世から思っていたが本当にこいつの思考回路は理解出来ん。

…まあそれは他の奴らにも言える事だが。

「にしし、それは嫌です！またお願いしますね？それではもう授業が始まるので上杉さんまた会いましょう！それではっ」

「お、おい四葉！」

四葉はそう言うと、俺の呼び掛けに無視する様に屋上から去っていった。

「…本当に嵐の様な奴だな」

突然来たかと思えば好きな事やって有無を言わさず去っていく。

こういう所も前世と変わらない。

「…はあ…くそ、頭から離れねえ」

四葉に抱き締められた時の様子が鮮明に蘇る。

あの時の温もり、心地良さを思い出すと自然と体が熱くなってくる。

意識しては駄目だと分かっているのに体が反応してしまう。

前世のままであれば何事も無かったのだがこれは予想外だ…

「…ってこんな事してる場合じゃない！」

こんな所で考え込んでる暇なんてない！早く行かなきゃ授業が…

「……………キーンコーンコーン。」

「…あ」

「…はあ…今日はいつも以上に疲れた…」

結局あの後先生に叱られた俺はしょんぼりしながら授業を受け気付けば放課後。

昼食の時まではいつもと同じだったがそこで五月と出会ってからごっそり体力が持っていかれた気がする。

五月と四葉からの好感度が何故高いのかという問題をずっと考えてはいるが一向に答えは出ず、一旦保留にした俺は帰る前に朝らいはから本を借りる様に頼まれていた為図書室に来ていた。

「にしてもまさからいはから頼まれるなんてな…」

朝、らいはから歴史の分かる本が沢山ある所知らない？って聞かれたもんだから前世

の記憶を頼りにうちの学校の図書室ならいっばい置いてあると言ったら借りて来て欲しいと頼まれた。

可愛い妹の頼みを断れず引き受けたが、らいはが歴史に興味あったなんて少し意外だった。

これはやり直してみないと分からなかったな。

「…久し振りだな。図書室」

中を見渡し俺はぼつりと呟く。

前世は勉強やらで良く利用していたこの図書室も、この人生では全く来ていなかった。

というのも中学の時に落ちこぼれの天才という不名誉な称号を付けられてからは、俺に対するクラスメイトからの視線がより一層冷たい物になった。

バカにするような目。腫れ物を見たかのような目。可哀想という同情の目。それは様々だった。

それは高校に入ってからでも変わらずで、中学が同じだった奴が俺の事を言いふらし、瞬く間に俺の名が広まった。

小学生の時は親の力や先生の力で勉強も運動も良く見せていた。中学の頃は手当たり

次第に女に手を出すクズだった。等関係の無い物も含め尾びれ背びれが沢山ついた状態で噂が一回つてしまっている。

運動はそうだが勉強は手を抜いた事何てないし当然うちの親にそんな権力も無い。先生だつて常に皆平等に接していたし女に手を出すなんて以ての外だ。

だがここで俺が必死に弁明した所で聞く耳を持たないし火に油を注ぐ行為となるだろう。

その為俺は否定する事無く今を過ごしている訳だ。

俺が図書室を利用していないのは、まあ図書室に限らずだがすれ違ふ人皆俺の事を不愉快な目で見るから俺は一秒も長く学校に居たくなかつたからというのが理由だ。

勿論心配を掛けたくないから親父やらいにはこの事は言っていない。

こればかりはらいはと歳が離れていて良かったと思う。

歳が近ければ嫌でも俺の噂を耳にするだろうからな。

ともかくにも早く終わらせよう。確か歴史のコーナーはこっちだったな。

俺は早く用事を済ませる為足早に目的地へと向かう。

そして目当てのコーナーに差し掛かったその時、俺の視界に見覚えのある姿が映つた。

「……」プルプル

「…」

高い所にある本を目一杯手を伸ばして取ろうとする背伸びした少女の姿。

もう限界なのだろう。表情こそは変化は見られないが伸ばしている腕が震えてしまっている。

特徴的な首に掛けた青いヘッドフォンと片目を覆った長めの前髪。そして四葉や五月と同じ顔。

そこにいたのは前世、俺が家庭教師で教えていた生徒の一人である中野家三女、中野三玖の姿だった。

「…何やってんだか」

一生懸命手を伸ばすも一向に届く気配は無い。

踏み台使えば良いのに。

「…むう…もうちよつと…」

俺の存在に気付いてる様子は無く一心不乱に目当ての本までの僅かな距離と格闘する三玖。

このままスルーという手もあるがそれはさすがに気が引ける。

仕方ない。助けてやるか。

三玖は基本的に他人に興味を持たない奴だったし別に本を取るぐらいで進展すると

は思えないから大丈夫だろ。

「欲しいのこれか？」

俺はそのまま三玖に近付くと、手を伸ばした先にある本を取り渡す。

「…あ…」

すると三玖は俺の顔を見るやいなや顔が赤くなり、恍惚の表情でこちらをじーつと見つめてくる。

気のせいだ。まさか本を取っただけで好感度が跳ね上がるなんてそんな訳が無い。それじゃあまるで惚れやすい軽い女みたいじゃないか。

顔が赤いのもただ恥ずかしいだけだと俺は信じてる。

「…やつと…会えた…」

ぼつりと呟いた三玖の言葉は良く聞き取れなかった。

一先ずこの場を離れた方が良い。そう思った俺は近場にあった歴史の本を数冊適当に取るとその場を離れようと動き出す。

「…じゃあ俺はこれで」

「…！…待って！」

…しかし、それは許されなかった。

俺が動き出したと同時に三玖は素早く動きガシツと腕を掴んでくる。

俺はお構い無しにそのまま行くこうとするがあら不思議、全く体が動かないでは無いか。

…あれ？三玖ってこんなに力強かったっけ？

「ま、まだ何か用が？」

俺は潔く諦め三玖と向き合う。

大丈夫だ。少し会話するだけだ。

三玖からの質問に答えるだけで良い。

「…名前…」

「…名前？」

「名前教えて？」

…ああそうか。五月と四葉が俺の名前を知ってたから感覚が麻痺しかけてたけど普通は知らないよな。初対面だし。

「…上杉風太郎だ」

「そっか…」

「ありがとう！フータロー」

「……」

その瞬間、満面の笑みでこちらを見つめる三玖に思わず胸が高鳴った。

予想外だった。三玖が初対面の奴にこんな表情をするなんて……

俺、顔に出てないよな？……ちゃんとポーカーフュイスを保てるだろうか？

「……フータロー？」

三玖が懐かしい呼び名を口にしながら心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。心なしか顔が近い。

一先ず一旦距離を取らなくては……

「だ、大丈夫だ。心配するな」

俺はそう言いながら数歩後ろに下がって三玖との距離を取る。

その時に三玖が「あ……」と名残惜しそうに声を漏らしたのは俺の気のせいであってほしい。

「それでまだ何か用があるのか？」

正直言えばこのまま本を借りて帰りたい。

用事が無い方がありがたいんだが……

「うーんと……」

三玖は俺の質問に頭を悩ませる。

別に無理して捻りだそうとしなくても良いぞ。

「…無いなら俺はもう」

「ある！あるからっ」

「…ああはい…」

帰ると言おうとした瞬間三玖から鋭い眼光が俺に飛んでくる。

それはまるで逃さないと言わんばかりに俺を捉えて離さない。

とてもじゃないが帰れる雰囲気では無さそうだ。

「……フータロー、その手に持つてるのって！」

質問の内容を思い付いたのか、花が開いた様な明るい表情を浮かべながら三玖が口を開いた。

少し興奮気味に三玖が指を指した先には俺が手に持っている歴史関連の本達。もとの適当に取ったから戦国武将についての本ばかり。

そういうえば三玖は歴史女だったな。戦国武将の知識なら前世の俺に負けない程の。

「ああこれか。歴史関連の本だよ」

「フータロー歴史好きなの？しかも戦国武将…」

「これは俺のじゃなくて妹から歴史関連の本を借りて来てって頼まれたから借りるだけだ。まあ俺自身も興味が無い訳じゃないが」

いざ調べてみると戦国時代は面白い逸話が多く、気付けば俺も武將に興味を持っていた。

これは紛れもなく三玖の影響だろう。

「そっか」

嬉しそうに笑う三玖。

きつと俺が武將に興味があるのを見て喜んでいるのだろう。

今度は俺が質問をぶつけることにした。

「あの子」

「三玖」

「…えっと」

「自己紹介まだだった。私中野三玖、中野家の三女。だから三玖って呼んで」

こりやまた唐突だな…

俺が一方的に三玖の事を知ってたから気にしなかったがそういえば三玖の自己紹介を聞いてなかった。

危ない危ない。名乗られてないのに三玖って呼ぶ所だったぜ。

「分かった。えっと…三玖は…その、好きなのか？」

少し視線を反らしながら言う俺。しかし、ここで気付く。

…しまった！三玖は武将好きな事をあまり知られたくない奴だからつい恐る恐る聞いたけどこれじゃ何が好きなのか分からない。

これじゃ三玖が答えられるはず…

「……好きっ！」

…えっ？

「……………」

「……………」

流れる沈黙。

目の前には顔を赤くしながら真っ直ぐこちらを見る三玖。

一方の俺はどう反応したら分からずただただ放心状態だった。

「…ふ、フータロー…う…」

…待て待て待て！三玖は今何に対して好きと言った？

まさか…俺の事か!?!

…いやいや待て待て落ち着け俺。そんな事がある筈ないだろ。

ただ本を取ってあげただけで恋愛に発展する訳が無い。それはさすがに自惚れすぎ

だぞ俺。

三玖が武将好きなのか聞かれる事を予想して答えた可能性だつてある。

うん、きっとそうだ。そうに違いない。

「す、すまん三玖。つい主語が抜けてしまつて良く分からない聞き方になつてしまつた」

「…え?…あつ…」

「俺が聞きたかつたのは三玖が武将好きなのかどうかだつたんだが…」

「…ー…あ…あ…」

え?え?何か顔真っ赤にして慌て始めたんだが!?

何だよあの「マズイ…早とちった」みたいな反応は！

くつ…いや、まだだ。まだ間に合う！

「もしかして、三玖もそれを想定して答えてくれたのか？」

「……そ、そう！私、戦国武将大好き！」

よしよし。やっぱりそうだ。三玖は分かっていたんだ。

少し汗をかきながら慌ててる三玖の様子が気になるがもうそういう事にする。

「や、やっぱりそうか！いいよな戦国武将って奥が深いし！」

「そう…やっぱりフータローは分かってる」

あははははと俺達の乾いた笑い声が図書室に響く。

図書室では静かにする事がマナーではあるが幸い俺達以外の人はこの場にはいない。

知らぬが仏という言葉がある様にこの世には知らない方が良い事もある。

まさに今がそれだと言えよう。

とりあえずこれ以上三玖が自爆する前に俺は退散しなくては。

「じゃあ今度こそ俺は…」

「フータローは！」

「……」

俺の言葉を遮るようにして言う三玖の張った声に思わず口を閉ざす。

三玖の顔を目を向けると、さつきまでの赤面していた様子から一変して少し不安そうにこちらを見つめている三玖の姿があった。

「…変だと思つてない？女子高生が戦国武将好きだなんて…」

…なるほど。こういう所は前世と同じつて訳か。

周りの皆がイケメンの俳優や美人のモデルの話で持ち切りな中三玖は髭のおじさん。

客観的に見れば変だと思われてもおかしくない部類。

だが別に俺は変だと全く思っていないし、過度な接触はしないと決めたがこいつらの悲しい顔を見たい訳じゃない。ただ全員一緒に笑っていて欲しいんだ。

となればまたあの時の様に認めてやろう。三玖の全てを。

「変じゃねえよ」

「……」

「そこまで好きになれる、夢中になれる物があるつて事は凄い事だぞ？周りの目なんて気にする必要無い。別に良いじゃんか、女子高生が武将好きでも」

俺の言葉に不安そうな三玖の表情が変わっていく。

そして、前世の時にも言った一言を三玖に放った。

「自分が好きになった物を信じるよ」

前世でもこうして三玖が不安そうにしていた時掛けた俺の言葉。

あの時は家庭教師をやるに辺り信頼関係を作らなければいけなかったから内心変だ
と思っていた本心を隠して言っていた。

でも、今は違う。

心の底から自分の本心でこの言葉を言う事が出来る。

「…フータロー…」

ホツとしたような安心したような表情でこちらを見つめる三玖。

前世では驚いて目を丸くしていたが今回はリアクションが違うんだな。

まああの時と場所も流れも違うから当然といえれば当然か。

「…ふふっ…やつぱり、フータローはフータローのままだ」

ぽつりと嬉しそうに呟いた三玖の言葉は今度は俺の耳に届いた。

三玖の言葉の意味は良く分からないが、表情を見る限りさつきまで抱いていた不安は
もう無くなっているようだ。

それでいい。楽しそうに嬉しそうにお前達が笑っていれば俺はそれで良い。

「じゃあ、もう大丈夫か？三玖」

「うん。ごめんね？いっぱい引き止めちゃって。ありがとう、フータロー」

「気にするな。じゃあな」

俺はそれだけ言うと、三玖に背を向け歩き出す。

呼び止められないという事はどうやらこの場を去ることを許してもらえたらしい。

何故この世界では初対面のはずの三玖があそこまで気さくに話し掛けてくれるのか、嬉しそうな笑顔を沢山俺にくれるのか俺には分からない。

ただ一つだけ分かるのは五月や四葉に続いて三玖からの好感度も高いという事だ。

何故こんなに3人からの好感度が高いのかは分からない。

別に悪い訳では無いんだが…このままあいつらとの距離が縮まってしまいで怖い。

…後は何事も無ければ良いんだがな。

三玖の物であろう熱い視線を背中に感じながら俺は、残りの姉妹二人への不安を募らせるのであった。